



写真：和気町立佐伯小学校 6年

単元導入時に、単元のめあて・単元計画・学び方を児童と教師で決める

和気町立佐伯小学校6年では、教科における探究的な学習を推進し、「教わる」から「学ぶ」へ児童の授業観の転換を図っています。具体的な活動として、単元の導入時に単元のめあてや単元計画、学び方を児童と教師で決めることに重点を置いています。

社会「世界の中の日本」の第1時の学習では、前単元で学習した諸外国との関係を踏まえ、まず「世界について知りたいこと、不思議に思うこと」を話し合います。自分の問いを全員に向けて語ることがポイントです。「日本はどここの国と何を貿易してるのか?」「中国との貿易が活発らしいよ」「石油が輸入できないと何で困る?」「日本は石油が採れないから」「何にそんなに使うんだろ?」「電気じゃだめなん?」「今調べたら北海道などで原油が採れるらしいよ」…。教師は時々児童同士の話し合いをつなぎながら、主には児童の発言を整理し板書します。話題はスポーツや文化にも広がり、話し合いが進むにつれて児童は問いの深まりを感じたり、もっている知識が断片的なものであることに気付いたりしていました。



教科書、資料集、端末を活用しながら話し合いを進める



児童の問いが中心の板書

次に単元のめあて、単元計画を考えます。児童が言語化して、みんなが納得できる単元のめあてをつくります。板書をもとに単元計画も考えながら、児童はこの単元でポイントとなるキーワードを探ります。教師も児童の思考に寄り添いながら伴走し、「日本と世界の“つながり”について調べよう」というめあてを設定しました。最後にどんな方法を使って学習を進めるかを話し合い、様々なメディアの活用や外国に住んだことがある人に話を聞くなどの意見が出てきました。このように学級全員で問いと向き合うことによって、児童が学習課題を「自分事」として捉え、「教わる」から「学ぶ」へ授業観の転換を図るとともに、STAGE3の学習にも発展させることができます。

実践者 角田直也 教諭に聞きました！

「なぜ?」「なに?（どういうこと?）」という見方を大切にしている

Q. STAGE3の実践に関わる単元計画の工夫について

A. 教師が設定した単元計画に沿って授業を進めるだけではなく、児童の問いを生かした学習を展開したいと考えました。理科では児童の思考に沿って追加実験にも取り組んでいます。

Q. 児童が問いを見い出すための工夫について

A. 教科等を問わず、「なぜ?」「なに?」という見方を大切にしています。自主的な予習も奨励しています。

Q. 本単元のまとめ・表現の設定について

A. 「世界で一番日本と関わりがある国はどこ?」というテーマで各自まとめを行い、発表、もしくは端末を活用した共有を通して意見交流することが考えられます。

Q. 端末活用について

A. 文房具として制約なく使えることを目指しています。児童が使ってみたいという思いを大切にしており、ノートづくりについても再考しています。